

宮沢賢治<春と修羅 第三集>の構想 試論： その前提と本文

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1992-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1493

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



宮沢賢治〈春と修羅 第三集〉の構想 試論

—その前提と本文—

杉 浦 静

宮沢賢治の〈詩集〉生成には、きわめて特徴的な様相が見て取れる。それは、一度、詩群の中からある一定の基準にもとづいて選択が行われた後に、ふたたび、その選択されて成立した〈詩集〉が解体されていく、ということである。これは、詩集として出版されることがなかったから、何度も詩集収録候補の選択がおこなわれる機会にめぐまれたからだ、ということでは解決のつかない問題をはらんでいよう。唯一生前に出版された『春と修羅』（以下、この『春と修羅』を第一集と略称する）についてみると次のような生成と解体の様相がある。まず、詩集の編集過程であるが、これは入沢康夫によって明らかにされたように〔「詩集『春と修羅』の成立」』『宮沢賢治 プリオシン海岸からの報告』筑摩書房 1991・2〕、四段階にわたっての編集作業が行われ、収録詩篇の差し替えにとどまらず、詩集としての主題を明確にするための詩篇そのものへの加筆や削除が行われている。これはあるきまった頁数に収めるための作業と見ることとも可能であるが、出来上がった詩集を見るとそのために空白ページが生じるという事態も起きているわけであって頁数の帳尻を合せることより、（詩篇・詩集全体の）推敲が優先していることを示すものである。このような四段階の過程を経て成立した第一集であるが、詩集刊行後、さらに詩集全体への推敲とも言える作業が進行した。現在のところ宮沢賢治の手が入った第一集は三種類が確認されている（これらは『校本宮沢賢治全集』にその手入れの実体が詳細に報告されている。）が、これらを見ると、多数の詩に手入れが行われている。まず、詩の本文の加筆訂正が行われているということが注目される。初

版発行の際に正誤表がすでに詩集の中に印刷されて付けられていたのだから、単なる誤植の訂正とのみは考えられない。一例を示せば、「永訣の朝」の次の箇所である。庭の松の木からへみぞれを／とってきたへわたくしは、それを妹のとし子が食べる際に、「こころから」の祈りをあげる。その箇所は初版では、「どうかこれが天上のアイスクリームになって／おまへとみんなとに聖い資糧をもたらすやうに／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」というものであったが、現在よく知られているこの箇所は、「どうかこれが兜卒ムササビの天の食に変わって／やがてはおまへとみんなとに／聖い資糧をもたらすことを／わたくしのすべてのさいはひをかけてねがふ」と、宗教性の強い表現に変えられている。しかし、これは、現在も宮沢家に残されている本のみの訂正である。このような加筆訂正の箇所は他にも限りなくあり、それがいつ行われていたのかということも明確になっていないのだが、重要な問題として残されている。さらに、詩篇そのものの削除ということも行われている。たとえば、藤原嘉藤治という宮沢賢治の友人の所蔵していた本では、「くらかけの雪」(宮沢家本での題名は「くらかけ山の雪」という詩篇が「全体に斜線を付す」(『校本宮沢賢治全集』校異)という形で詩集から削除されている。詩集からの削除の印があるのは、この一篇にとどまらず、三種類の手入れ本全体では相当数にのぼるのである。このような営みは、一度成立した詩集『春と修羅』を解体するものと言っていいであろう。そして、あらたな〈第一集〉とよぶべきか、第一集のバリエーションの一つにとどめるべきかという点では、議論の余地があるにせよ、出版した詩集を絶対のものとしてそれに特権的な位置を与えていないことや、きわめてフレキシブルな詩集への向かい方がうかがえるのである。

このような生成と解体の様相は、未刊行であった〈春と修羅〉第二集では、より、明確にうかがえる。〈第二集〉は昭和三年初夏に「序」が書かれて、刊行もかなり程度具体化したようだが、おそらくその年の八月に賢治が病(この病気が癒えたのは昭和六年)に倒れ、闘病から回復の期間中に詩に対する態度も変化したこともあって、結局刊行されなかったものである。どのような形態を構想したのかは推測するほかないのだが、最初に第一集に続けて刊行しようとした時は、

謄写版刷りの簡易なものを考えていたようである。(これは、若い友人に宛てた手紙に書いている。また詩集刊行とは異なる目的であったようだが、謄写版で刷られた心象スケッチも一篇発見されている。)次いで、活版による印刷(?)を考へ、この時期に「序」が書かれた。謄写版で作成しようとした時、どのような詩を収録しようとしたのかは不明であるが、「序」が書かれた後に、第二集の指定期間(大正一三・一四年)にメモあるいは第一形態が書かれた詩篇の中から、二度にわたって選択しようとした詩篇に関しては、ほぼ確定することができる。これが昭和三年初夏の段階の構想である。この際の、最初の選択と二度目の選択を比較すると、一度目より二度目の方が詩篇の数をしぼり込んでいるが、かといって一度目に選ばれなかったものも二度目には選択して、選択の基準も異なっているかと考えられる。この後、病を経て、ふたたび第二集を整理するが、その際には、黒クロースの表紙を用いて〈定稿〉〈未定稿〉〈第二集に加ふるもの〉の三種に分類した。たぶん、この時期に、跋にあたる「春と修羅第二集終結」が「兄妹像手帳」に書かれた。しかし、この分類も、〈文語詩〉が整理される時期には、ふたたび廃棄された。そして、最晩年(昭和八年)に至って、〈第二集〉の期間内の日付を有する詩篇から、あらためて選び直されて〈定稿用紙〉に記入された稿が成立しているのである。このように、あらためて、選び直されたと判断する根拠は、次の様なものである。賢治は時期によって詩稿用紙を使い分けていたので、推敲が進むにしたがって、つまり、逐次形が進むにしたがって、異なる詩稿用紙へと記入されるという傾向がある。何度も、そしてあとの時期に推敲されればされるほど逐次形の数が増加する。ところが、〈定稿用紙〉に記入されたものには、最初メモか何かから、詩稿用紙に転記されたままそれ以上の推敲が加えられていないものもあれば、昭和七年に書かれた逐次形から〈定稿用紙〉に記入されているものまでである。特定の時期に推敲され特定の詩稿用紙に書かれた詩篇のグループからのみ選ばれてはいないのである。このように、第二集の構想到数段階が想定され、その際に、選択のしかたはその前の段階における選択をほぼ無視しているということは、選択の際にそれ以前の選択が解体されたということの意味してよい。つまり、あらたな〈詩集〉が生成することに、解体が同時に進行する、そして、解体と生成が繰り返され

て行ったのである。賢治においては、テキストはまさに賢治の身体とともに死と再生を繰り返しつつあった。

このような解体と生成は〈第三集〉においてはいかなるものであったか。第三集は、これまで「生活記録風の詩」（原子朗）の集成と読まれることが多く、賢治の農村での自称農民としての生活のなかで、周囲の共同体や農民とのあつれきや疎外意識を読み取り、挫折へとなだれてゆく過程の索引として読まれる傾向が強かった。確かに、詩風は平易を装うようになり、第一集・第二集の一九二〇年代のモダニズムにつらなるような前衛的な試みも影をひそめているのだが、しかし、農村における生活現実をどのように認識し直すか、認識の変化によって現実をわずかでもずらして受け取ろうとする試みは粘り強く行われようとした、その詩（スケッチ）による実践としても読めるのである。

しかし、このようなことを主張する前に、〈第三集〉とは何かという問題を確認しておかねばならないだろう。〈第三集〉は未刊行の詩集である。〈第三集〉という名称は、昭和六年から七年にかけて賢治が詩稿の整理に用いた黒クロス紙の表紙の中に「心象スケッチ／春と修羅／第三集」と書かれたものがあることに拠っている。賢治はこのクロス表紙を用いた詩稿整理を後に解体してしまったために、どのような詩篇がここに挟まれていたのかは推定するほかないが、現在われわれが〈第三集〉と称しているのは、このクロス表紙に指定された期間、すなわち「自昭和元年四月 至三年七月」に該当する日付を付された詩篇のすべてである。現在もともと信頼できる『校本宮沢賢治全集』も『新修宮沢賢治全集』も全集の性格上、この指定の期間に該当する詩篇をとりあえずすべて〈第三集〉の詩篇と呼んでいる。仮定の上で言えば、おそらく、いや、ほぼ確実に宮沢賢治が詩集として〈第三集〉を刊行したならば、この現在われわれが全集で読んでいる〈第三集〉とは異なるものとなったであらう。賢治が詩集『春と修羅 第三集』を刊行しようとしたか否かは、メモに書かれた「第三詩集」という語句の読みと関わって微妙な問題である。しかし、現在残されている詩篇（第三集）の草稿（下書稿）を検討していくと、いくつかの段階に分けられ、その段階毎に、賢治自身の選択があったことが確認される。その段階は以下のようにまとめられる。

第一段階 〈メモ・手帳〉に記入された詩篇群（〈メモ・手帳〉は現在存在しない）

第二段階 「詩ノート」に転記された詩篇群（「一〇一篇」）；昭和二年五月頃～三年七月頃

第三段階 「詩ノート」より選択されて詩稿用紙に記入された詩篇群（「四一篇」）；昭和五年秋以降

第四段階 詩稿用紙形が推敲され、選択されて⑦が付けられた詩篇群・黒クロス表紙への分類・挟み込み（「二六篇」）；

昭和六・七年頃

第五段階 第四段階を解体して、〈定稿用紙〉へ選択記入した詩篇群（「六篇」）；昭和八年

ここでは、紙数の関係もあって個々の段階の推定根拠は、拙稿「〈春と修羅〉の行方―賢治晩年の詩稿整理」（『宮沢賢治 Annual』創刊号1991・3 宮沢賢治学会イーハトーブセンター）、「春と修羅 第三集」の生成（『宮沢賢治』11号1992・「洋々社」）に記したのでここには示さないが、各段階ごとに、その性格を検討すれば、賢治自身の構想に近い、〈第三集〉の生成と解体の様相を明らかにすることができるはずである。

以下に示すのは、昭和六年以降に詩集の構想メモが書かれた時期に最も近い、第四段階の詩集収録予定詩群である。さきの拙論にこの構想における詩集の性格の一端は示しておいたが、宮沢賢治の構想した〈第三集〉は以下の本文に拠って考察される必要がある。なお、以下の本文決定にあたっては、『校本宮沢賢治全集』校異にもとづきつつ、宮沢賢治記念館所蔵宮沢賢治草稿マイクロフィルムを参照した。また題名で、「」に包まれるものは、宮沢賢治自身が未記入のため、便宜的に一行目を題名としたものである。

※

畑を過ぎる鳥の影

青々ひかるやまの稜

七〇六 村娘

一九二六、五、二、

雪菜の薹を手にくだき

ひばりと川を聴きながら

うつつにひとものがたる

いちめんひろがる萱の芽だ

……水を汲んで砂へかけて……

※ 本稿は藍インク斜線で削除されている。スケッチ

本文は鉛筆書き。手入れ、⑦記号は赤インク。本紙葉

は、裏から表にかけて天地逆にへ春と修羅 第二集

の「一一八 函館港春夜光景」(一九二四、五、一九)

の下書稿(四)が藍インクで書かれている。この記入

に際して「村娘」に斜線が引かれたと考えられる。

〈第二集〉の赤野詩稿用紙段階以降の手入れが〈第三

集〉の黄野24系段階より遅れてなされたことをうかが

わせる例でもある。

川をななめに溯って行く

……水を汲んで砂へかけて……

向ふ岸には蒼い衣のヨハネが下りて

すぎなの胞子をあつめてゐる

……水を汲んで砂へかけて……

岸までくればまたあたらしいサーペント

……水を汲んで砂へかけて……

七二一 水汲み

一九二六、五、一五、

七二四 疲労

一九二六、六、一八、

ぎっしり生えた萱の芽だ

赤く光って、

仲間同志に影をおとして

距離の知れない敷物のやうに、

南の風も酸っぱいし

穂麦も青くひかって痛い

それなのに

崖の上には

わざわざ今日の晴天を、

西の山根から出て来たといふ

黒い巨きな立像が

眉根にルビーか何かをはめて

三つつも立って待ってゐる

あの雲にでも手をあてゝ

疲れを知らないあゝいふ風な三人と

せいっぱいのせりふをやりとりするために

電氣をとってやらうかな

※本稿は全体に鉛筆で「×印」が付されているが、これは文語詩化の後の記入と考えられる。

七一八 蛇踊

一九二六、六、二〇、

この萌えだした柳の枝で

すこしあたまを叩いてやらう

叩かれてぞろぞろまはる

はなはだ艶で無器用だ

がらがら蛇でもない癖に

しっぽをざらざら鳴らすのは

それ響尾蛇に非るも

蛇はその尾を鳴らすめり

青い

青い

紋も青くて立派だし

りっぱな節奏リズムもある

さう そのポーズ

いまの主題は

「白びかりある攻勢」とでもいふのだらう

しまひにうすい桃いろの

口を大きく開くのが役者のこわさ半分に

所謂見栄を切るのにあたる

もすこしびちゃびちゃ叩いてやらう

今日は既肥をいぢるので

蛇にも手などを出すわけだ

けれども蛇よ、

どうもおまへにからかっていると
酸っぱいトマトをたべてるやうだ
おまへの方で通げるのか
それではひとつわたしも通げる

七二八 井戸

一九二六、七、八、

こゝから草削カサヅをかついで行って
玉菜畑へ飛び込めば

何か仕事の推進力と風や陽ざしの混合物

熱く酸っぱい亜片マブのために

二時間半がたちまち過ぎる

そいつが醒めて

まはりが白い光の網で消されると

ぼくはこゝまで戻って来て

水をごくごく呑むのである

七二六 風景

一九二六、七、一四、

松森マツモリ蒼穹ソウキウに後光を出せば

片頬黒い県会議員が

ひとりゆっくりあるいてくる

羊歯ヨウシやこならの丘いちめん

ことしも燃えるアイリスの花

七二八 「雨はそゞぎ」

一九二六、七、一五、

雨アメはそゞぎ

開墾した藪は

土のけむりや湯気をあげる

……それにやくざな土のほひだ……

ぬれてぼうとして

ぎしぎしおこる

おかしなことだ

杉にそゞいで

カダチは白いしづきをあげる

……枯れた羊歯の葉

菊芋の茎

壊れて散ったその塔を

いまいそがしく往来する蟻……

杉には白いしぶきをあげる

(あゝ愛憎の図式を洗へ)

※推敲の最終形態を本文として採用している『校本宮

沢賢治全集』では、本スケッチは「[濼雨はそくぎ]」

という題名になっている。これは本稿の次の段階で、

冒頭一行目に手入れがなされたためである。

七三三 休息

あかつめくさと

きむぼうげ

おれは熊熊だ 観念しろよ

遠くの雲が幾ローフかの

麵麩にかはって売られるころだ

あはは 憂陀那よ

冗談はよせ

ひとの肋を

抜身でもってくすぐるなんて

※「一九二七、八、二七」という日付は下書稿(一)

から本稿(下書稿(三))まで一貫して変化していな

いが、作品番号の「七三三」から「一九二六」の誤記

と判断される。

七三六 「濃い雲が二きれ」

一九二六、九、五、

濃い雲が二きれ

シャーマン山をかすめて行く

(何を吐して行ったって?)

(雷沢婦妹の三だとさ!)

向ふは寒く日が射して

蛇紋岩サベツクワインの青い鋸

七三九 朝

霧がひどくて手が凍えるな、
がつがつトマトを食ふのをやめろ

一九二六、九、一三、

馬がびくっと

ももをうしろへ引きつけるのは

木のゆれるのとおんなじさ

縄をなげてくれ縄を

雲がどんだん碎ける時分

赤いすゝきをいっばい刈って

みんなでならんで帰って来やう

※使用されている詩稿用紙は他と異なり黄罫26系詩稿

用紙であり、また⑦の記入位置も「作品番号上方」で

ある。最終形態を本文として採用している『校本宮沢賢治全集』では、本スケッチは「霧がひどくて手が

凍えるな」という題名になっている。これは、「朝」という題名が次の段階の推敲で削除されたためである。

七四〇 秋

江釣子森の脚から半里

荒さんで甘い乱積雲の風の底

稔った稲や赤い萱穂の波のなか

鍋倉上組合のけらを装った年よりたちが

けさあつまって待ってゐる

恐れた歳のとりいれ近く

わたりの鳥はつきつき渡り

野ばらの藪のガラスの実から

風が刻んだりんだうの花

……里道は白く一すじわたる……

やがて幾重の林のはてに

赤い鳥居や鼻スエの塚や

一九二六、九、二三、

おのおのの田の熟した稲に
異なる百の因子を数へ

われわれは今日一日をめぐる

青じろいそばの花から

蜂が終りの蜜を運べば

まるめろの香とめぐるい風に

江釣子森の脚から一里^{マイ}

雨つぶ落ちる萱野の岸で

上鍋倉の年よりたちが

けさ集って待ってゐる

七四一 白菜畑

霜がはたけの砂いっぱい

エンタシスある柱の列は

みな水いろの影をひく

十いくつかのよるとひる

病んでもだえてゐた間

こんなつめたい空気のなかで
千の芝罘白菜は

はぢけるまでの砲弾になり

包頭連の七百は立派なパンの形になった

こゝは船場を渡った人が

みんな通って行くところだし

川に沿ってどっちへも抜けられ

崖の方へも出られるので

どうもこゝへ野菜をつくっては

盗られるだらうとみんな云った

けれども誰も盗まない

季節にはひとりでにかういふに熟して^{マイ}

朝はまっ白な霜をかぶってゐるし

早池峰薬師ももう雪でまっしろ

川は爆発するやうな

不定な湯気をとぎどきあげ

燃えたり消えたりしつづけながら

どんだん針をながしてゐる

病んでゐても

あるひは死んでしまっても

残りのみんなに対しては

やっぱり川はつづけて流れるし

なんといふいゝことだらう

あゝひっそりとしたこのはだけ

けれどもわたくしが

レアカーをひいて

この砂つちにはいってから

まだひとつの音もきいてゐないのは

それとも聞こえないのだらうか、

巨きな湯気のかたまりがいま日の面を通るので

柱列の青い影も消え

砂もくらくはなつたけれども

一〇二二 会合

唐獅子いろのずぼんをはいて

どこの親方かと思つたよ。

春木を柵マツりに行くんだな

久慈だの、

藤原太藏だの

やっぱり二月に行つてゐるさうだ

……木にはいっぱい氷がついて

野原はうらうら白い偏光……

いまどの辺で柵マツつてるのかな

八方山の北側か

ずるぶん奥へはいったな

……雪に点々けぶるのは

三ツ沢山の松のむら……

ぼくの方はまるでだめだ

からだを傷めてしまつてさ

今日はソーンへ行くところだ

例の肥料とイモチのことさ

……江釣子森が

氷醋酸ミツの塊りのやうだ……

※下書稿(一)からずっと「一九二八」であるが、作品
番号「一〇一二」から「一九二七」の誤記と判断され

る。また「三、三」は下書稿（「詩ノート」稿）では「三、二一」であるが、詩稿用紙記入稿では「三、三」となっている。「詩ノート」からの推敲転記の際に「二一」を「三」と読み違えたためであろう。最終形態を本文として採用している『校本宮沢賢治全集』では、本スケッチは「〔甲助今朝まだくらあに〕という題名になっている。これは、「会合」という題名が次の段階の推敲で削除されたためである。

一〇一四 春

一九二七、三、二三、

野原は残りのまだらな雪と

黝ぶり滑べる夜見来川

雲が淫らな尾を引いて

青々沈む波羅密山アマの、

松のあたまをかすめて越せば、

山の向ふは濁ってくらく

二すじしろい光の棒と

わづかになまめく笹のいろ
野原はまだらな磁製の雪と
温んで滑べる夜見来川

※『校本宮沢賢治全集』校異では紙葉「右上隅」の⑦を「文語詩に関するものか」と判断を留保している。他の①と同位置であるという根拠しかないのだが、ここでは、口語のスケッチに関するものと考えておく。

一〇一七 開墾

一九二七、三、二七、

野ぼらの藪を、

やうやくとってしまったときは

日がかうかうと照ってゐて

そらはがらんと暗かった

おれも太市も忠作も

そのまゝ笹に陥ち込んで、

ぐうぐうぐうぐうねむりたかった

川が一秒九噸の針を流してゐて

鶯がたくさん東へ飛んだ

一〇二五 「燕麦の種子をこぼせば」

燕麦の種子をこぼせば、

砂が深くくらく、

黒雲は温く妊んで

一きれ、一きれ、

野ばらの藪を涉って行く

一九二七、四、四、

二人は憎悪のまなこして

岸のはたけや藪を見ながら

身構えをして立ってゐる

……あれらの憎悪のひとつみから

あらたな文化がうまれるのか……

どんより澱むひかりのなかで

上着の肩がもそもそやぶけ

どんだん翔ける雲の上で

ひばりがくるほしくないてゐる

一〇三〇 春の雲に関するあいまいなる議論

一九二七、四、五、

あの黒雲が、

きみをぎくつとさせたとすれば

それは群集心理だな

この川すじの五十里に

麦のはたけをさくったり

桑を截ったりやうてゐる

われらにひとしい幾万人が

ぼろぼろの南京袋で帆をはって
船が一さうのぼつてくる
からの酒樽をいくつかつけ
いっばいの黒い流れを、
むらきな南の風に吹かれて
のろのろとのぼって行けば
金貨を護送する兵隊のやうに
人が三人乗ってゐる

一人はともに膝をかゝえ

いままで冬と戦ってきた情熱を

うらがなしくもなつかしいおもひに変へ

なにかほのかなのぞみに変へれば

やり場所のないその腫を

みなあの雲に投げてある

それだけでない

あのどんよりと黒いもの

温んだ水の懸垂体

あれこそ恋愛そのものなのだ

炭酸瓦斯の交流や

いかさまな春の感応

あれこそ恋愛そのものなのだ

一〇三三 森

ヨークシャ豚の犬ものが

二番むすめに追ひつめられて

まるではげしい金毛けに変わ

独楽こまよりひどく傾きながら

西日をさして遁マユげててゐる

まっ黒な森のへりに沿って

ただまっしぐらにかけてゐる

棒もかざして髪もひかる

日本州の里長のむすめ

梢せう枯れかかった栗の向ふで、

ぐらぐらゆれてゐる銅の夕日

里長が青い麻を着て

森のこっちにあらはれて

なにかむしやむしや食ひながら

小手をかざしてそらを見る

※最終形態を本文として採用している『校本宮沢賢治全集』では、本スケッチは「あの犬もののヨークシヤ豚が」という題名になっている。これは、「森」という題名が次の段階の推敲で削除されたためである。

一〇三六 燕麦播き

白いオートの種子を播き

一九二七、四、一一、

間に汗もこぼれれば

畑の砂は暗くて熱く

藪は陰気にくもってゐる

下流はしづかな鉛の水と

尾を曳く雲にもつれるけむり

つかれは巨きな孔雀に酸えて

松の林や地平の線

たゞ青々と横はる

※『校本宮沢賢治全集』では、本稿の先駆形を二種類

採用している。いずれも「詩ノート」掲載のもの。一

つは「一〇二六」(四、四)、他は「一〇三六」(一九

二八、四、一一)である。

一〇四三 市場帰り

一九二七、四、二二、

雪と牛酪^{ブター}を

かついで来るのは詮之助

やおお早う

あたまひかって過ぎるのは

杖を杖つく村老ヤコブ

お天気ですな まっ青ですな

並木の影を

犬が黄いろに走って行く

お早うよ

朝日のなかから

かぼんをさげたこともらが

みんな叫んで飛び出してくる

一〇五三 朝

一九二七、五、三、

おい

けとばすな

けとばすな

なあんだたうたう

こんな色彩の鮮明なものが

もう森ちゆうにあるもんか

このうつくしい傘のカーミン

このまっしろけな脚とかさ
ぎっしりきれいな

菌糸の網さ

毒だってムスカリンだって

抽出すればうつくしき結晶するさ

まうかうなつては

つめたい雨にとけるだけだ

おおい!

りんとひっぱれ!

りんとひっぱれたら!

山の上には

雲のラムネが湧く、

つめたい雲のラムネが湧く

※最終形態を本文として採用している『校本宮沢賢治全集』では、本スケッチは「〔おい けとばすな〕」という題名になっている。これは「朝」という題名が次の段階の推敲で削除されたためである。

一〇五六 「秘事念仏の大元締が」

一九二七、五、七、

秘事念仏の大元締が

今日は息子と妻を使って、

北上ぎしへ陸稲播き、

なまめるい南の風は

川を溯ってやってくる

秘事念仏のかみさんは

乾いた牛の糞を捧げ

もう導師とも恩人とも

じぶんの夫をおがむばかり

緑青いろの巨きな蠅が

牛の糞をとびめぐる

秘事念仏の大元締は

麦稈帽子をあみだにかぶり

黒いずぼんにわらじをはいて

よちよちあるく鳥を追ふ

紺紙の雲には日が熟し

川は鉛と銀とをながす

秘事念仏の大元締は

むすこがぼんやり楊をながめ

口をあくのを情けながって

どなって石をなげつける

楊の花は黄いろに崩れ

川はげしい針になる

下流のやぶからぼろっと出る

紅毛まがひの郵便屋

一〇六八 「エレキや鳥がばしゃばしゃ飛べば」

エレキや鳥がばしゃばしゃ飛べば

九基に亘る林のなかで

枯れた巨きな一本杉が

もう専門の避雷針とも見られるかたち

……けふもまだ熱はさがらず

Nymph, Nymbus, Nymphaea……

杉をめぐって水いろなのは

羊齒から花を借りてきて

梢いっぱい飾りをつけた

古い解の樹でもあらう

それらのなかの一本が

しばらくおれにたよりなのだ

……最後に

火山屑地帯の

小麦に就て調査せよ……

雲はみな淫らな尾を曳いて

しづかに森をかけちがふ

一〇七九 僚友

わたくしがかつてあなたがたと

この方室に卓を並べてあましたころ、

たとへば今日のやうな明るくしづかなひるすぎに

……窓にはゆらぐアカシヤの枝……

ちがった思想やちがったなりで

誰かと訪ねて来ましたときは

わたくしどもはたど何げなく眼をも見合せ

一九二七、七、一、

またあるかなし何ともしらず表情し合ひましたのでしたが

……崩れてひかる夏の雲……

今日わたくしが疲れて弱く

荒れた耕地やけはしいみんなの腫を避けて

おろかにもまたおろかにも

昨日の安易な住所を慕ひ、

この方室にたどつて来れば、

まことにあなたがたのことばやおもちは

あなたがたにあるその十倍の強さになって

……風も燃え……

わたくしの胸をうつのです

……風も燃え 禾草も燃える……

※本スケッチは二種類の逐次形に①が付されている。

赤野詩稿用紙使用の下書稿(一)と黄野24詩稿用紙使

用の下書稿(三)である。ここではより後の形である

下書稿(三)を本文に採用した。

一〇八〇 「さわやかに刈られる蘆や」

一九二七、七、七、

さわやかに刈られる蘆や

水ぎぼうしの紫の花

赤くただれた眼をあげて

風をみつめるその刈り手

※「詩ノート」段階での日付は「一九二七、七、一〇」。

停留所にてスイトンを喫す

一九二八、七、二〇、

わざわざここまで追ひかけて

せっかく君がもつて来てくれた

帆立貝入りのスイトンではあるが

どうもぼくにはかなりな熱があるらしく

この玻璃製の停留所も

なんだか雲のなかのやう

そこでやっぱり雲でもたべてゐるやうなのだ

この田所の人たちが、

苗代の前や田植の後や

からだをいためる仕事のとときに

葉にたべる種類のもの

除草と桑の仕事のなかで

幾日も前から心掛けて

まことにきみのおっかさんが拵えた、

雲の形の膠朧体、

それを両手に載せながら

ぼくはもう青くくらく

かうもはかなくふるへてゐる

きみはぼくの隣に座って

ぼくがかうしてゐる間

じっと電車の発着表を仰いでゐる、

あの組合の倉庫のうしろ

川岸の栗や楊も

雲があんまりひかるので

ほとんど黒く見えてゐるし

いままた稲を一株もって

その入口に来た人は

たしかこの前金矢の方でもいっしょになった

きみのいとこにあたる人かと思ふのだが

その顔も手もたゞ黒く見え

向ふもわらつてゐる

ぼくもたしかにわらつてゐるけれども

どうも何だかじぶんのことでないやうなのだ

ああ友だちよ、

空の雲がたべきれないやうに

きみの好意もたべきれない

ぼくははつきりまなこをひらき

その稲を見てはつきりと云ひ

あとは電車が来る間

しづかにこゝへ倒れやう

ぼくたちの

何人も何人もの先輩がみんなしたやうに

しづかにこゝに倒れて待たう